

世界に目を向け、未来を見つめる。

「ボイス・オブ・ライフ」

2025 AUTUMN

VOICE OF LIFE

Take Free

10

裁かれなかった 日本軍の 毒ガス使用

毒ガス製造の島が問う加害の歴史



Dialogue for People

COVER PHOTO

巨大な毒ガス貯蔵タンクが置かれていた長浦毒ガス貯蔵庫跡。

取材／安田菜津紀・佐藤慧

カタコトと軽快なリズムを奏でながら、呉線は広島県の瀬戸内海沿いをゆつくりと進んでいく。その車窓から見える、穏やかな波間に浮かぶ島々のひとつが、大久野島だ。

今はその姿をゆつくりと眺めることができるが、かつては列車内の海側の窓は、全て遮蔽されていた。大久野島は「地図から消された島」として、そこで行われていることのすべてが「機密」とされていたのだ。その島にかつて存在した日本軍の工場では、毒ガス製造が進められていた。

大久野島は忠海港からフェリーで15分ほどの場所にある。ぐるりと一周しても4キロほどの小さな無人島だ。宿泊施設はあるものの、そこに「居住」している人はいない。

島には今も、ヒ素が入った筒が地中に埋められている場所もある。飲み水にもヒ素汚染の恐れがあり、飲料水は島外から運ばれている。

人間を使い捨てるサイクル

この島に毒ガス工場が作られる

い」という念書を書かされ、死刑になる可能性があると言われ、捨てられて、解雇されていったそうです」

「戦争遂行」という大義のため、人間を部品のように扱い使い捨てていくサイクルが、この島に存在したのだ。

島には「幹部用防空壕」の跡地も残る。頑丈なコンクリート製で、電灯もつくような構造になっていたようだ。他方、動員学徒たちは、自分たちで掘った「たこつぼ」へと

じめたのは1927年、毒ガス製造が始まったのは1929年のことだ。毒ガス兵器は第一次世界大戦に用いられ、130万人を超える被害者を生み出す深刻な被害をもたらした。1925年、ジュネーブ議定書は、こうした毒ガスや生物兵器の使用を禁じた。

長らく平和ガイドを務めてきた、毒ガス島歴史研究所事務局長の山内正之さん、そして代表の静代さんが島を案内してくれた。

「日本はジュネーブ議定書に積極的に賛成したんです。戦争での使用は禁止すべきだ、と。ところがそ

の後、中国では2000回以上、日本軍が毒ガスを使用したことが判明します」

裁かれなかった日本軍の毒ガス使用

毒ガス製造の島が問う加害の歴史

【上】島内を案内してくれた山内正之さん。工場跡地にはリゾート施設が建つ。
【下】忠海港からのぞむ大久野島。戦時中は地図から消されていた。



正之さんが語るように、日本政府は戦前、このジュネーブ条約を批准はしなかったものの、署名はしているのだ。「何が国際条約違反になるのか」も、当然心得ていたはずだ。

島の「機密」が徐々に知られるようになっていったのは、1980年ごろからだと言われている。

「学者たちがアメリカの公文書から様々な資料を見つけてきました。毒ガス使用命令書や、陸軍習志野学校で教科書として使われていた毒ガスの実践例などもあります」

「その前にもたくさんの方が死んでいましたし、中には自殺した人もいます。国際条約違反の毒ガス戦のことが知られていくことを警戒したんでしょう。国は長らく毒ガス障害を放っておいたんです」

動員学徒にも医療援助が及ぶようになったのが1975年、軍属との格差が是正されたのが2001年だ。しかし支援は限定的であり、かつ法制化されているわけではない。

日本軍の毒ガスは主に中国で使われ、多くの命を奪っていた。敗戦にともない、毒ガスは中国に大量に遺棄されていくが、戦後何も知らない現地の人々が触れてしまい、被害が拡大していくことになる。それでも中国人被害者に対する日本政府からの公的な救済措置はなく、公式の謝罪もないままだ。

本来であれば日本が敗戦を迎えた際、こうした毒ガス使用もふくめて東京裁判で裁かれるべきだった。

当時、大久野島で働いた人は把握されているだけで約6700人、大部分が近隣住民だった。

「毒ガス製造にあたる人たちの防護服は一人ひとつ配れるほどの数はなく、使いまわしたつうえ、質も悪かったようです。体調が悪くなると倉庫係などに配置換えされ、体調がある程度よくなると、また製造に戻される」。いよいよまた体調が悪化すると、「医務解雇」として島から追放され、ここで見たことは口外しない、破れば軍法会議にかけられても構わな

かったでしょう。東京裁判で日本を裁いてしまえば、自分たちもそれを使いにくくなるから困る。もし東京裁判で日本に責任をとらせ、悲惨な歴史を学んだら、米国はベトナムであんなに無茶はできなかったかもしれない」

日本の敗戦後にソ連との衝突を想定していた米国の「思惑」によって、毒ガス使用とその被害が正面から顧みられることはなかった。そして米国が使用した枯葉剤などの化学兵器が、ベトナム戦争で甚大な被害をもたらすことになる。

戦争は今も「終わって」いない。加害を認め反省しない社会は、その帰結として「同じ過ちを繰り返す」ことになる。そうした未来を招かぬよう、この島の歴史から学ぶべきことは多い。

◎安田・佐藤

取材



安田 菜津紀

Natsuki Yasuda

中東、東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。



佐藤 慧

Kei Sato

アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追う。



【上】毒ガスタンク跡地を指し示す山内静代さん。寒冷地用の「凍らない毒ガス」も製造されていた。【右下】かつて動員学徒たちが「風船爆弾」を作らされていた建物。【左下】「MAG」とは弾薬庫を示す。大久野島は戦後、米軍により接收・使用されていた。

裁かれなかった毒ガス使用

毒ガス製造を命じられ、その危険な作業により障害を負うことになった人々の支援は、1954年、ようやく「軍属から」始まっていく。

COLUMN

感情の中にある対話の手がかり

Dialogue for People 伏見和子



小手川正二郎さん(左)とD4P伏見(右)。動画シリーズを見た方々と語り合う会をオンラインで開催しました。



WEBで記事を読む



小手川正二郎さんと語る「感情と対話の哲学」(前編)
対話できない相手からは、逃げるしかない？



意見が合わない人とどう対話したらいいの？【感情と対話の哲学】第1回『感情と対話』(小手川正二郎)



WEBで動画を見る

「社会課題について、身近な人とでもなかなか話しづらくて。」D4Pの支援者の方から、そんな声を聴くことがありました。大きな声がまかり通り、分断がどこにあるかわからない今、「対話すること」はますます難しくなっているのかもしれませんが。この春、対話の困難さについて考える動画を、哲学を教える小手川正二郎さんと制作し、公開後、動画を見た方々と「語りあう会」も開催しました。考える糸口としたのは、怒りや恐れなど、私たちが日々抱く「感情」です。理性の対極とされ、「感情的にならないこと」が重視される一方、インターネットにあふれる無数の感情から世論が形成され、私たちの日々の行動は感情の影響を受けて決まります。小手川さんが語る「感情の哲学」では、こうした感情の特性を知ることで、実は自分自身にも自分の感情がよくわかっていないことに気づけたり、分断を引き起こしやすい「妬み」などの感情が、他者との対話や連帯につながる可能性が示されます。そこでの「対話」のイメージは、正面から向かい合ってする討論ではなく、ただ「お互いにお互いの話を聞き合うような」関係性です。聞き合う中でふと本音が漏れたり、別の視点に触れることで、少しずつでも歩み寄ることができるのではないか——。前提として、対話が成立し得ないような場合にはそこから逃げる、自分を守ることを最優先としつつも、対話を諦めず、その手がかりを探し続けたいと思います。

BOOK OF LIFE

不条理も
見過ごさない

新刊発売！

遺骨と祈り

著・写真：安田菜津紀

産業編集センター／1,760円(税込)
2025年5月22日発売購入は
こちらから

死者をないがしろにする社会が、生きた人間の尊厳を守れるのか？安田菜津紀が福島、沖縄、パレスチナを訪れ、不条理を強いられ生きる人々の姿を追った、6年間の行動と思考の記録。原発事故で娘・汐凧さんの捜索を阻まれてきた木村紀夫さん。沖縄で遺骨収集を続け、辺野古基地建設が戦没者をも冒険しながら推し進められようとすることに抗してきた具志堅隆松さん。具志堅さんが福島県大熊町を訪れ、帰還困難区域で汐凧さんの大腿骨を発見したのは2022年1月のことです。この本は当初、二人の交流を軸に編む予定でした。ところがパレスチナ・ガザ地区で大規模な虐殺が起き、二人もその不条理と向き合うことになります。



福島県大熊町の帰還困難区域内、汐凧さんの遺骨捜索現場で共に作業を行う具志堅隆松さん(左)と木村紀夫さん。

D4P職員のつぶやき

西田 朋世 / D4P広報部



VOICE OF LIFEも今号で10号目を迎えました！2020年から毎号テーマを変えて発行し続けることができたのも、サポーター並びに読者のみなさまのおかげです。また、号を重ねるごとに配架先も増え、今では全国30箇所以上でたくさんの方に手に取っていただいております。ご協力いただいている店舗のみなさまにも、改めて御礼申し上げます。配架先は随時募集しておりますので、いつでもお問い合わせお待ちしております！



Dialogue for People

認定NPO法人Dialogue for People (ディアローグ・フォー・ピープル/D4P)

国内外様々な地域で社会課題の渦中にある人々取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

d4p

検索

<https://d4p.world>D4PのSNS一覧は
こちらから

各地での取材をYouTubeで配信！



安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で毎週水曜に配信中。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索！

d4p

検索

